

MAPキナーゼ経路抑制因子Sprouty4の、乳癌における働きの解明

当研究は当第二外科において2002年から2006年までに食道癌を切除した方を対象に研究させていただきます。

【はじめに】

Sprouty4は元来、発生において気管分枝に関わる遺伝子のひとつとして発見されております。しかし最近になり、Sprouty4は癌増殖と密接な関係のあるERKシグナルに介し、ERK経路活性を抑制し、癌の悪化を抑制するのではないかと考えられてきています。しかし乳癌組織におけるSprouty4発現の低下に関してはまだわかっておらず、研究が進むことで将来、乳癌の患者さんに有益な結果を得ることができる可能性があります(図1)。

【研究内容】

当九州大学消化器・総合外科(第二外科)において切除された乳癌の病変から抽出したDNA、RNAを使って、Sprouty4に関する染色体不安定性、あるいは発現量を評価します(図2)。

またSprouty4を同定する染色を行い、これらのたんぱく質の出現の程度を測定します。

この染色の結果と患者さんの背景を比較し、Sprouty4が果たして乳癌においてどういった影響を持つのか考察します。

【患者さんの個人情報の管理について】

本研究の実施過程及びその結果の公表(学会や論文等)の際には、患者さんを特定できる情報は一切含まれません。

もし対象者となることを希望されない方は、下記連絡先までご連絡下さい

【研究期間】

研究を行う期間は2011年までと考えております。

【医学上の貢献】

この研究により乳癌におけるSprouty4発現低下と臨床病理学的因子および予後との関連が示唆されれば、新しい予後因子などが明らかとなり、医学上の貢献はあるものと考えます。

【研究機関・組織】

九州大学大学院 消化器・総合外科(第二外科)

教授 前原 喜彦

准教授 掛地 吉弘

大学院生 中ノ子 智徳

連絡先: 〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1

Tel 092-642-5466

担当: 中ノ子 智徳

図1. Sprouty4によるERK経路の抑制と癌細胞浸潤・運動能との関係

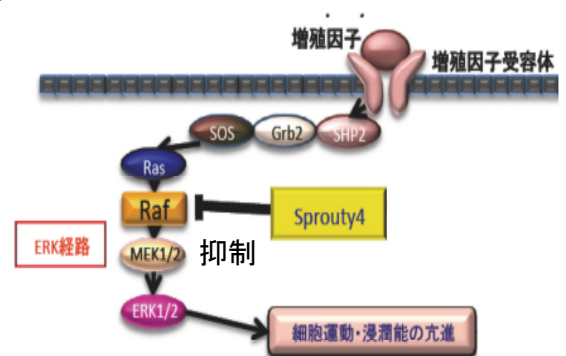
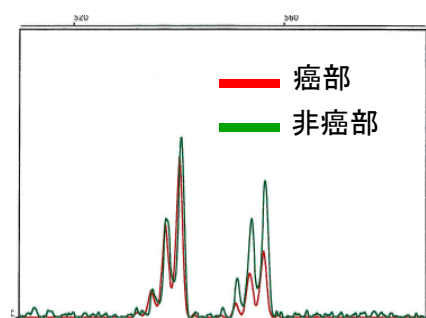


図2. 癌部、非癌部におけるLOHの検討



癌部のアレルは、非癌部のアレルに比べ、30%以上の低下が認められる。